

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：17201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730800

研究課題名(和文) 高大接続の観点からみる高等学校普通科のキャリア教育に関する実証的研究

研究課題名(英文) experimental study on career education of high school from the point of view of educational articulation between high school and university

研究代表者

西郡 大(Nishigori, Dai)

佐賀大学・アドミッションセンター・准教授

研究者番号：30542328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学進学希望者を対象とした普通科高校におけるキャリア教育に注目し、高大連携活動の代表的な取り組みである「出前講義」について、高大接続の観点から検討した。具体的には、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」「出前講義に対する満足度」「実施大学に対する親近感」という3つの変数に影響を与える要因を分析し、出前講義の効果と限界を明らかにした。これらの知見を踏まえ、今後進められる高大接続改革において、高大連携活動をキャリア教育としてどのように位置づけるべきかを考察した。

研究成果の概要(英文)：It was the purpose of this study to examine the effect and limitation of delivery lecture which is one of educational articulation between high school and university from the point of view of career education. The participants were high school students who took delivery lecture(N=5,635). The results indicated that delivery lecture increased student's desire to learn. Fresh sense and amazing discovery of higher education particularly had a big influence on increasing desire to learn. To enhance student's satisfaction of taking delivery lecture, the following four factors is important. Those factors were "teacher's performance", "initiating the interest of content of a lecture", "fresh sense and amazing discovery of higher education", "understanding content of a lecture". For universities for the purpose of acquiring applicant, delivery lecture had limited effectiveness against acquiring applicant.

研究分野：教育社会学

キーワード：キャリア教育 高大連携活動 普通科高校 出前講義

1. 研究開始当初の背景

「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」(中央教育審議会,1999)によりキャリア教育が推進されて以降、「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書」(文部科学省,2006)において、普通科高校におけるキャリア教育推進のための方策として6つの枠組みで15の提言がなされた。同提言の1つのである「学校間・学校種間の更なる連携・協力の推進」では、「高校から大学等への授業参加、大学から高校への出前講座といった高大連携の取り組みが広がってきたものの、『出口指導』や『授業紹介』にとどまっているなど、キャリア教育の視点から取り込まれてきたとは言い難い」と現キャリア教育の問題点が指摘されている。

一方、大学全入時代の高大接続は、学生の「選抜」から、学生と大学の「相互選択」へ方向転換が図られるべきだとされる(中教審,2008)。当然、多くの生徒が大学進学を希望する普通科高校のキャリア教育では、「大学と高校の連携や協力がもたらす効果」が期待されるはずである。となれば、高大接続の観点から、現在の普通科高校のキャリア教育の実情(特に、大学が関与する部分)を分析し、どのように大学が関わるのが普通科高校のキャリア教育に効果をもたらし、さらに高校生の進学意欲等を促進することに繋がるかを明らかにすることは、円滑な高大接続を図ると同時に、進学希望者と大学の「相互選択」を実現する上で不可欠な要素となる。

2. 研究の目的

大学進学希望者を対象とした普通科高校のキャリア教育に注目し、高大接続の観点から検討する。具体的には、普通科高校のキャリア教育の一環として実施されている高大連携活動の代表的な取り組みである「出前講義」の効果と限界について以下の観点から明らかにした。

(1)高校教員が期待する「学習意欲の喚起」や「進学意欲の喚起」は、出前講義によって高められているのかを分析することで、高校側の狙いが出前講義によって実現されているのかを検証した。

(2)出前講義を受講した生徒が感じる受講内容に対する満足度に注目し、どのような要因によって受講者の満足感が高められているのかを明らかにした。

(3)出前講義を行う大学にとっては、出前講義の内容に興味や関心を持ってもらい、あわよくば自分の大学や学部を受験して欲しいという思惑もある。そこで、出前講義を実施することがどの程度の広報的な効果があるのかを検証した。

3. 研究の方法

研究代表者が所属するS大学では、平成12年度から高校と大学との連携を目的とした出前講義を実施しており、毎年、約200名の教員が派遣され、約5,000名の生徒が受講している。講義内容は、文学、教育学、芸術学、経済学、経営学、法学、医学、理学、工学、農学など多様な学問分野で構成されている。出前講義を希望する高校は、大学から提供される「講義メニュー」の中から希望する分野のコースを選択して依頼する。なお、実施日前までに、各高校の担当者と派遣教員とで内容の打ち合わせをすることでミスマッチの最小化を図っている。

実施後には、受講した生徒と当該高校の教員数名に質問紙調査を実施している。本質問紙は、出前講義の効果検証を目的として実施してきたが平成22年度と平成23年度のみ、本研究を行うために項目を変更して実施した。平成22年度は、予備調査として実施し、不適切な項目や修正が必要な項目を見直し、平成23年度において本調査を実施した。

質問項目は、性別、学年、大学・短大の進学希望有無、S大学に対する関心、講義内容に対する受講前の関心、そして受講後の感想である。受講後の感想は、「そう思わない」「あまりそう思わない」「どちらとも言えない」「少しそう思う」「そう思う」の5件法で尋ねた。従属変数として、「大学進学に向けた学習意欲等の喚起」「出前講義に対する満足度」「実施大学に対する親近感」の3変数(12項目)、独立変数として、「大学に対する新鮮な発見や驚き」「派遣教員個人の力量」「講義内容に対する理解度」「講義内容に対する興味・関心の喚起」の4変数(20項目)を想定した。これらの変数について、因子分析、重回帰分析、分散分析等の多変量解析を行った。

4. 研究成果

(1)「大学進学に向けた学習意欲の喚起」の平均値はもっとも高く、少なくとも受講直後において彼らの学習意欲は喚起されていることが示された。その大きな要因として、「大学に対する新鮮な発見や驚き」が挙げられる。つまり、出前講義による学習意欲の喚起を目的とする場合、高校では得られない経験や体験をもたらす講義を大学側に要望することが重要なのである。特に、1年生を対象とする場合、その効果は高かった。

一方、「講義内容に対する理解度」は、あまり重要な要因ではない。出前講義を担当する大学教員は、高校生に合わせた内容の設定や話し方などを意識しながら、模擬講義や実験を行っていると考えられる。しかしながら、大学進学に向けた学習意欲を喚起するためには、講義内容の理解を高めるよりも、新鮮な発見と驚きを意識した内容で構成する方が効果的である。講義の担当者は、生徒の学習意欲の喚起よりも、自分が行う講義内容を少しでも理解して興味を抱いて欲しいと考

える者が多い。ここに高校側が期待する思惑（学習意欲の喚起など）との違いがあるのだとすれば、派遣教員と高校教員が事前に十分に打ち合わせをしなければ有意義な活動とはならない。

また、大学・短大への進学希望者有無や受講前の講義内容に対する関心度合いの違いによる差も確認された。つまり、大学・短大といった高等教育機関への進学を希望し、関心のある講義内容を受けることができたときに、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」に大きな効果がみられる。実際の現場では、複数の学問分野の講師を集めるために複数の大学から講師を招き、事前に生徒の希望分野を把握して、受講者を割り振るのが一般的である。しかし、受講者数の制限やすべての学問分野を揃えられないという現実的な制約などから、生徒すべての希望に応えることは難しい。さらに、高校生が持つ学問に対するイメージもステレオタイプのものが多く、特定分野へ人気が集まる傾向がある。高校によっては、生徒の希望する分野でなくても、様々な学問分野に触れることが新たな発見につながるのだから必ずしも生徒の希望する分野と一致しなくてもよいと考えるところもあるようだが、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」を最大限に行うとすれば、上記のような条件を満たすことが必要である。

(2) 出前講義に対する満足度は、「派遣教員個人の力量」「講義内容に対する興味・関心の喚起」「大学に対する新鮮な発見や驚き」「講義内容に対する理解度」の4要因による影響を大きく受けていた。特に、「派遣教員個人の力量」は満足度に対して大きな影響力を持っている。つまり、単に大学から講師を呼び、生徒に模擬講義を受講させることが満足度を高めるのではなく、その講師の力量に頼るところが大きいことを示している。また、「講義内容に対する興味・関心の喚起」の持つ影響力も大きい。本変数と「派遣教員個人の力量」には中程度の相関が確認され、両要因の相乗効果も考えられる。

注目すべき点は、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」に対して大きな影響力をもつ「大学に対する新鮮な発見や驚き」が、「出前講義に対する満足度」では、「派遣教員個人の力量」や「講義内容に対する興味・関心の喚起」ほどの影響力を持たないことである。「大学進学に向けた学習意欲の喚起」と「出前講義に対する満足度」には一定の相関関係がみられるため、まったく無関係であるわけではない。しかし、「出前講義に対する満足度」を高めることが、必ずしも「大学進学に向けた学習意欲の喚起」に直結するわけではないことが示された。つまり、出前講義の効果を検証する際に、受講生徒が満足しているからといって、学習意欲の喚起等には必ずしも繋がっていないことを意識しなければならないことを示唆している。

(3) 高大連携活動の一環として実施されることが多い出前講義であるが、大学の立場としては、学生確保に向けて自大学の魅力を伝えたいという思惑がある。しかしながら、出前講義によって「実施大学に対する親近感」が特別に高まるという傾向はみられない。ただし、受講前における実施大学に対する興味・関心の程度と「実施大学に対する親近感」には、一定の相関関係が確認されるため、受講前から実施大学に関心のある生徒に対して、より魅力的な情報や刺激を与えることで親近感が部分的に強化される。もちろん、中程度の相関関係ということは、出前講義によって「実施大学に対する親近感」が低下した生徒も部分的に存在することを示しており、誰でもよいから大学から講師を派遣し、生徒に接触して出前講義を実施しさえすれば広報的な効果があるという考え方は見直す必要がある。少なくとも「出前講義に対する満足度」に大きな影響を与える要因は、「派遣教員個人の力量」や「講義内容に対する興味・関心の喚起」であった。つまり、こうした講義を実施できる教員が担当することが広報的な視点からみれば重要なのである。

(4) 「高等学校キャリア教育の手引き」(文部科学省, 2011) の第2章第5節では、高大連携活動の狙いと効果として、「高校生が大学の授業の一端を知ることや、大学生活の様子を聞くことで、大学生活を思い描き、高等学校と大学の関連を知るとともに進学への意欲を高める」「大学の授業レベルを知り、大学での学びと現在の学習とのつながりを認識し、学習意欲の向上を図る」「大学の施設や雰囲気を知ることにより、進路選択の一助とする。」といった項目が挙げられている。本研究の結果からは、こうした狙いや効果は、出前講義によって部分的に達成できているとみることができる。しかしながら、出前講義を中心とした高大連携活動は次なる展開を検討していく必要がある。

まず、出前講義の受講後やオープンキャンパス参加後のアンケート結果などからは、「学習意欲が増した」といった一定の効果がみられるが、これらのイベント型の活動は、「単発的」という側面があるため、ここで生じる学習意欲の喚起は、一時的な効果とみることができる。さらに、出前講義などは、高校生にもっとも刺激的でわかりやすい部分にフォーカスした内容になりがちである。しかしながら、一般的な研究活動は、地道な実験やデータ整理あるいは論文購読等が大半を占め、刺激的な場面に出会えることは稀であるといってもよい。確かに、「大学に対する新鮮な発見や驚き」を意識した講義内容は、高校生にとって魅力的な機会であることは間違いがないが、地味な活動も併せて伝えることが大学入学後のミスマッチを抑制するために必要な点である。

こうした課題点を踏まえたとき、高大連携活動の在り方は、「単発型」から「継続型」に向けた取り組みの転換が求められる。SSH (Super Science High School) のような特定の高校を対象とした取組ならば、継続型は実施されているが、その恩恵に与る生徒は、当該高校の生徒たちに限定される。もちろん、SSH 指定校は、SSH としての取り組みを他の高校にも発信していく活動が求められており、様々な活動が実施されている。しかし、SSH 以外の高校において、単発的な出前講義が未だ高大連携活動の中心である実情を考えると、大学からの働き掛けも様々な工夫がなされてもよいのではないかと考える(例えば、竜田・林・米田,2015)。

近年、高大接続改革として大学入試における多面的・総合的な評価が強く求められるようになった(中教審答申,2014)。その中で、高校生の活動実績や履歴などを評価するための多元的な評価尺度の必要性が示されている。一方、大学進学を目指す生徒が多い進学校では、大学入試に向けた学習活動が中心であり、「進路指導=大学入試」という構図が一般的である。しかし、高大接続改革にともない大学入試の在り方は大きく変わるかもしれない。同改革では、大学入試だけでなく、高等学校教育、大学教育の一体改革が謳われている。普通科高校のキャリア教育では、「断片」を関連づけて体系的・系統的に進めていくことが重要である(国立教育政策研究所,2011)。高大接続改革の大きな動きの中で、普通科高校におけるキャリア教育の位置づけがより重要になってくると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

西郡大「キャリア教育からみた出前講義の効果と限界 普通科高校のキャリア教育に高大連携活動をどのように位置づけるか」『Quality Education』(査読有),vol7,(印刷中)

〔学会発表〕(計1件)

西郡大「大学の出前講義は、高校生にどのような変化をもたらすのか?」.キャリア教育学会第36回大会(国内:琉球大学 沖縄県中頭郡西原町),研究発表論文集,pp.118-119.2014.11.23.

〔図書〕(計1件)

西郡大「受験生心理からみる大学入試」『大学入試と高校現場-進学指導の教育的意義-』(東北大学高等教育開発推進センター編 東北大学出版会),27-66,2013年3月.

〔その他〕(計1件)

アウトリーチ活動:「キャリア教育からみる高大接続の課題と展開」.平成25年度九州地区国立大学・高等学校連絡協議会(基調講演者),2013.6.17.

6. 研究組織

(1)研究代表者

西郡 大(NISHIGORI DAI)

佐賀大学・アドミッションセンター・准教授

研究者番号:30542328